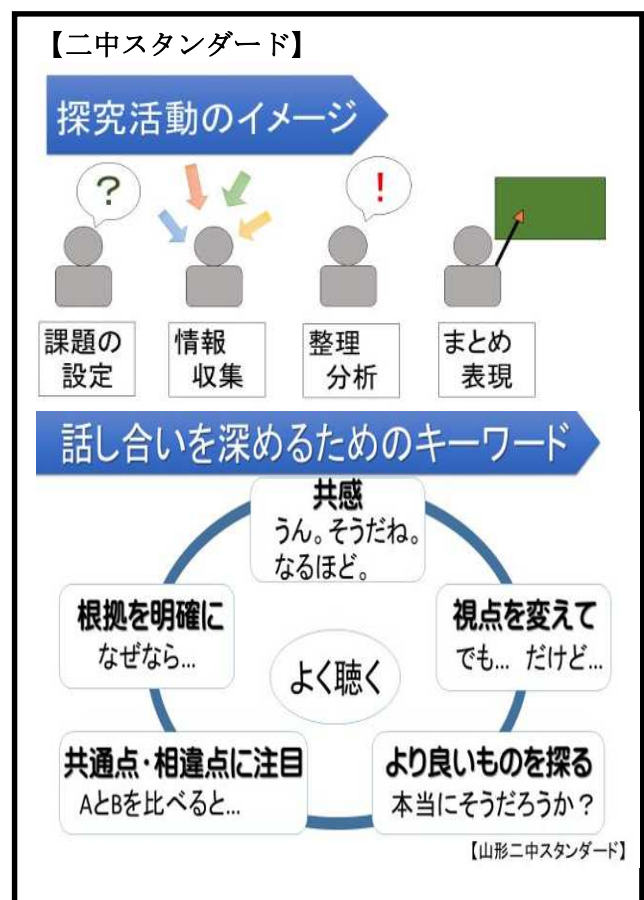


<様式>

学 校 名	山形市立第二中学校 山形市西崎 62 番地 TEL 644-3902 FAX 645-8253	校 長	小関 広明
		研究主任	伊藤 慎亮
研 究 主 題	個々の主体的な学びを高める授業の創造（三年次） ～「二中スタンダード」による協働的な学びの実践を通して～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>本校では、令和元年度より、探究型学習としての活動イメージや話し合いを深めるためのキーワードとして「二中スタンダード」を作成し、授業のみならず、学級活動や生徒会活動、総合的な学習の時間等、生徒の様々な活動の場面での活用を図り、豊かな表現力の育成を継続して行っている。</p> <p>昨年度は、研究主題の副題を「『二中スタンダード』の実践による表現力の向上を通して」として、各教科での授業実践を軸として、学習形態に「ブレインストーミング」や「ワールドカフェ方式」など、様々な表現活動を取り入れ、主体的・対話的な学びを充実させることで、深い学びに結び付けようと取り組んできた。また、朝活動の中でも思考スキルを高めるためのトレーニング等を計画的に実施し、表現力の向上に力を入れた。その結果、学期ごとに全校生徒を対象に行った学習状況調査では「自分と違う意見について考えるのは楽しい」「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができた」という項目では8割を越える生徒が肯定的な回答をしている。</p> <p>しかし、「自分の考えを発表する場面では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している」という項目では、肯定的な回答が年度の中で減少傾向にあった。また、「自分の思いや考えをもとに、作品や作文など、新しいものを創り出す活動を行った」という項目についても、他の質問より低い傾向にある。こうした結果から、表現することの楽しさや意義を感じるようになってきたといえるが、「話し合い」などの活動が、実践力としての「学び合い」や「学力や主体性の向上」にまで十分につながったとはいえない。また、これまで仕組んだ様々な活動で、話す側と聞く側が固定化したり、必要感を十分に感じていない様子が見られたりしており、仲間とのかかわり合いの中で学び合いの高まりを実感させていくことが必要である。</p> <p>以上のことから、今年度は、昨年度の活動をベースに「協働的な学び」の中において「二中スタンダード」をどう発展させるかに焦点を当て、「知識・技能の定着」や「思考力・判断力・表現力の深化」「学習意欲・理解度の向上」につなげ、生徒の「協働的な学び」として実践していく。</p>		



<p>研究の目標</p>	<p>本研究は、本校の教育目標である「未来に向かって主体的に生きぬく生徒の育成」の実現を目指し、生徒の主体性を育むことと教師自身の授業力向上を目標としている。昨年度取り組んだ「表現力」を、より具体的に活用できる生徒の育成を目指すとともに、組織的、かつ計画的な取り組みを推進していく。学習指導要領で重視している「主体的・対話的で深い学び」の視点に立ち、「協働的な学び」を通して各教科等における生徒の資質・能力を確実に定着させ、伸ばしていくことを大きな「ねらい」とする。</p> <p>目指す生徒の姿</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 自分の学習状況を把握し、意欲的に学びに向かう生徒</li> <li>(2) 「自分」「物事」「人」に向き合い、豊かなかかわり合いの中で自分の考えや思いを表現できる生徒</li> <li>(3) 他教科や生活の中で活用できる知識を身につけ、学んだことを課題解決に活かすことのできる生徒</li> </ul>
<p>研究の仮説</p>	<p>インプットした知識及び技能をもとに、仲間との交流の中で自分の考えや思っていることを「言葉」や「文字」で積極的にアウトプットすることで、身に付けた「知識や技能、思考力」などがより確実に定着していくと考える。またその際、各教科の見方・考え方を活かして「インプット」と「アウトプット」を繰り返し実践することで、相乗効果をもたらしていくと考えられる。こうした学びを「協働的な学び」の中で、意図的に展開することで、生徒同士の「わかった」や「できた」がより確かなものとなり、個々の生徒の意欲と主体性をより高めることができるものと考ええる。</p>
<p>研究の内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 一人一授業の実践研究 <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が課題に取り組んでみたくなるような課題、指導計画の作成</li> <li>・表現力（思考スキル）を活かした「協働的な学び」の授業実践</li> <li>・育成したい資質・能力を身に付けさせるための工夫（例：「ICT機器」の効果的な活用など。）</li> <li>・学びの確認（例：振り返りシート、実技実践など。）</li> </ul> </li> <li>(2) 「二中スタンダード」の全校一斉指導 <ul style="list-style-type: none"> <li>・表現力（思考スキル）の育成、活用を目指した活動</li> </ul> </li> <li>(3) P・D・C・Aのサイクルの実践 <ul style="list-style-type: none"> <li>・可能な範囲での定量的な振り返りを行い、年間を通じた実践にしていく。</li> </ul> </li> </ul>
<p>研究の方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 研究推進委員会を毎週金曜日に開催し、本研究を推進していく。</li> <li>(2) 学校教育目標の具現化のため、校内研修等を含めた授業改善と生徒一人一人の学力向上を一体的に捉え、全職員の共通理解のもとに組織的・計画的に研究活動を推進する。</li> <li>(3) 毎学期末に生徒の学習状況調査を実施し、取り組みの成果と課題を把握する。</li> <li>(4) 校内授業研究会の実施 <ul style="list-style-type: none"> <li>一人一授業すべての教科で研究授業の実践を行う。教科の人数的に授業が組めない場合は、それ以降に教科部会等で授業研究を計画し、実践する。2学期は、事後研究会などでの振り返りや助言を取り入れて授業を行い、P・D・C・Aのサイクルで年間を通じた授業研究とする。</li> </ul> </li> <li>(5) 校内研究のまとめとして研究紀要の作成を行う。 <ul style="list-style-type: none"> <li>年度の終わりに研究内容と実践結果として教科ごとの実践を研究紀要としてまとめる。全員で成果と課題について考察し、次年度以降の校内研究につなげる。</li> </ul> </li> </ul>
<p>研究の方向性</p>	<p>本研究の推進にあたっては、生徒同士が思考スキルとしての「二中スタンダード」を共有し、それを実践していく力を高める。また、そのスキルが「協働的な学び」を効果的に進められるツールになるようにしていく。授業者としては、「何ができるようになればいいのか」「どんな力をつけるのか」という到達点を明確に示し、カードやボードで情報を可視化して対話を行ったり、小集団での話し合いを充実させたりするなどの工夫を行う。さらに、ICT やオンラインを活用し、生徒同士、あるいは学校の枠を越えた多様な他者とつながることも有効な手段である。このように「協働的な学び」の中で、言葉や文字を使って交流していくことにより、知識・技能の実践的な定着や思考力の形成を目指す。</p>

研 究 の 計 画	4月 6日	3観点による学習評価の二中バージョン提案 : 研究推進委員会
	4月下旬	年間指導計画、評価の観点等の作成 : 研究推進委員会
	5月	授業研究会に向けた教科での計画、事前研究、指導案作成 : 教科部会
	5月29日～	「二中スタンダード」をイメージした表現力を高めるための全校一斉指導 : 担任 (各クラスにおける朝活動で実践)
	6月下旬	指導案完成、送付 : 教科部会、研究推進委員会
	7月11日	校内授業研究会の実施 (村山教育事務所訪問) : 研究推進委員会、教科部会
	8月～12月	各教科の計画に沿った授業研究会の実施 (一人一授業の実践) 7/11 研究授業を通しての授業改善、実施、検証 : 全教員
	9月11日～	「二中スタンダード」をイメージした表現力を高めるための全校一斉指導 : 担任 (各クラスにおける朝活動で実践)
	12月11日～	「二中スタンダード」をイメージした表現力を高めるための全校一斉指導 : 担任 (各クラスにおける朝活動で実践)
	1月～2月	各教科の研究まとめ、研究紀要作成 : 研究推進委員会、教科部会
3月	研究紀要発行	